

繁殖から肥育までの一貫経営に関する技術

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 義弘, 紙屋, 茂, 花田, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10232/9837

繁殖から肥育までの一貫経営に関する技術

松山義弘・紙屋 茂・花田博之

研修地 尾崎農場

宮崎市大字大瀬町3122

宮崎大学農学部附属農場住吉牧場

宮崎市大字島之内10100-1

日 程 1995年3月7日～3月8日

入来牧場では年間約140頭の子牛を生産し、一部は市場出荷や自家用素牛として育成している。また、肥育素牛の一部は離島を中心に価格の安い放牧生産子牛を導入し、運営の節減にも勤めている。そこで今回は一貫経営技術の向上を目的に、繁殖及び肥育技術水準の高い肉用牛農家で研修した。

尾崎農場は肥育を主体にしながら繁殖牛も飼育し、子牛は肥育素牛にむけコスト削減をはかっている。また、肥育牛では枝肉の上物率が80%以上である。健康で安全な牛肉生産をめざし、独自の自家配合肥料で飼育し、健康維持および食欲増進につとめていた。更に、子牛の発育向上や下痢防止にはラクリスSを飼料に添加し給与していた。また牛にストレスを与えないために、それぞれの部屋の環境を揃えていた。特に、十分な休息地をもうけ、牛どうしの相性にも心がけていた。素牛購入にあたっては価格の高い牛を導入しないで、安価な個体導入に努力していた。今後は素牛コストを更に抑えるために繁殖牛を増やし、生産から肥育まで一貫経営をめざそうとしていた。一般の畜産農家では堆肥処理に困り、公害を心配している状況にあるが、本農場では敷料にバークを使い、臭いの無い堆肥をつくり販売していた。

これらの諸技術の中から牧場で取り入れられる事を検討したい。特に経費節減の為に単味配合とラクリスSの利用等を取り入れる必要があると思われた。

住吉牧場は総面積が50.4haで、和牛94頭及び乳牛48頭を飼育していた。草地面積は9.64haで、教官2名、技官6名および事務官2名で、大型機械等を使い農場を管理していた。牧場では機械格納庫が十分な面積で確保され、全部の機械がよく整備されるため、機械の耐用年数が長くなっていた。入来牧場では十分な機械の格納庫がなく、高価な大型機械が屋外保管状態になっている。入来牧場での機械の格納庫の必要性を痛感した。